

木村定三氏の古硯コレクションを見て

澄心堂 北畠 五鼎

木村定三氏の古硯コレクションを概観すると中国、朝鮮、日本の硯に亘っている。まず中国の硯から見ると、時代は漢唐から始まり、明清に及んでいる。種類も端溪石、歙州石を中心に玉硯、陶硯、澄泥硯などが含まれている。この集めかたは、戦後日本の趣尚を色濃く反映していると思う。つまり、わが国における古硯の蒐集、研究は明治時代に始まり、大正から昭和初期にかけて図譜や研究書が刊行されだしたのである。

がんらい古器物の蒐集というものは、いきなり水準以上のものが買えるものではない。初歩の段階で失敗をくりかえし、眼力を鍛えることで奏功する。木村定三氏の古硯コレクションにしたって、現三十面という骨格を構成しているが、ここまで淘汰するには数十面以上の無駄をしていると想像される。

戦後、古硯のコレクションで名の知られた名家は十指を数える。しかるに木村氏のコレクションは公けに知られてなかった。それはたぶん、取り上げる人が居なかったためかもしれない。たとえばコレクションの中に相国寺橋本独山の遺愛硯も含まれている^{注1}。独山は古硯の蒐集で知られ、今でも旧蔵硯は貴ばれている。それを知るのの一部の知識人のみである。

木村コレクションには朝鮮と日本の古硯も若干散見される。しかし、古硯の蒐集はむかしから中国のものが絶対的な存在となっている。それはなぜか。日本では端溪石のような名石が産出しなかったためである。木村コレクションにしても中国の古硯が八割を占めている。たぶん戦後、中国の古硯を恒常的に扱ってきた古美術商及び書道用品店から購入していた形跡が読みとれる。

古硯の蒐集ブームがあったのは戦前に第一次のブーム、戦後に第二次のブームがあったように聞いている。戦後生まれの筆者は第二次ブームの中で研鑽を積んだ一人である。それは昭和四十年ごろの話である。主に東京中心に活動していたため関西、中部の情報には疎かった。ただ書家のトップクラスの人達はこぞって古硯を蒐集し著録を出していた。だが、それらは虚勢を張ったものが多く、文化的な香りのするものは少なかった。たぶん木村氏は、書画にともなう重要な古美術品として着眼し蒐集したのではないかと想像される。古美術品を広く鑑賞し購入した氏の眼に裏打ちされた選びかたは古硯の蒐集にも生かされたようで、俗っぽい硯には手を出していない。それは氏のコレクション全体を俯瞰すれば自ずと解ることである。

硯の世界ではコレクターと呼ばれるには、三百面ぐらいは所蔵していなければならなかった。多い人で五百面、中には千面をこす古硯を所蔵していた人もいた。けれどもここで質の

問題ということも出てきた。硯は耐久性が高いから、学童の使ったような硯なら無数に伝わっている。そのようなレベルの古硯を三百集めてもコレクターとは呼べない。

硯という器物は墨をする用具だから、第一に石の質ということが問題となる。第二に名硯は鑑賞品だから、器形・彫琢の良さということも重視される。第三に当代の著名文人が所持していたという伝来性もやかましく論じられる。第四に保存状態の良しあしも大事になってくる。つまり大きく分けて、美術性と歴史性である。木村コレクションの中にもリスト10番の歙州長方硯板があるが、紫檀の硯匣に聖祖康熙帝の御題詩が刻されており、いわゆる歴史性の高い一硯である。

おわりに古硯の美術性ということを考えておきたい。木村コレクションの7番に日月硯があり、これを取りあげて説明してみたい。この硯は明代に採石された端溪水岩の子石^{しせき}が用いられている。水岩の石というのは歴史的坑であり遠く唐末のころより採掘されている。硯というより宝石にちかい石である。ともかく川底のさらに下より採掘した石なのである。多くは皇帝の命で採掘したので、莫大な経費をかけた文化事業だった。水岩の石は黄金と等価だった時代もあったぐらいである。

日月硯はその水岩の子石を用いた名品である。子石というのは水岩の鉱脈の中で単独に生成した材のことである。全体は卵形で風韻があり、石質は細密で手ざわりは赤子の肌であった。これを感性こまやかな文人が貴ばないわけがなく、多くの愛硯家に渴望された。

専門的に言うならば日月硯は、明坑水岩と呼ばれる石で、全体に褐紫色を帯びた材である。硯面の上部に大小二顆の活眼が現れている。これを日月に見立て、さらに日月を陰の墨池に彫っている。側面と背面は彫琢を加えず、自然の形状を止めている。

注1) No.3 《蓬萊硯》(カラー口絵P.1~P.3、本文P.24) No.7 《日月硯》(カラー口絵P.5、本文P.27)
No.24 《石渠硯》(本文P.39)